1

キリスト教神学
第2章　神学と哲学

一宮基督教研究所
安黒務

2

「キリスト教神学」
概略

1

1. 神を研究すること
2. 神を知ること
3. 神はどのような方か
4. 神は何をなされるか
5. 人間
6. 罪

2

7. キリストの人格
8. キリストのみわざ
9. 聖霊
10. 救い
11. 教会
12. 終末

3

第1部　神を研究すること
概略

1. 神学とは何か
2. 神学と哲学
3. 神学の方法
4. 神学と聖書の批評的研究
5. キリスト教のメッセージの今日化
6. 神学とその言語
7. ポストモダンと神学

4

序

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

5

第2章　神学と哲学
概略

1. 神学と哲学との関係についての諸類型
2. 20世紀の哲学
    1. プラグマティズム
    2. 実存主義
    3. 分析哲学
    4. プロセス哲学
    5. 脱構築
3. 神学による哲学の活用

6 ☐ # 序論

1. 神学が最も影響を受けたもの
2. 哲学が枝分かれする以前

7 ☐ # 第1節　神学と哲学との関係についての諸類型

1. 哲学と神学は全く関係がない
   1. テルトゥリアヌス（AD160-230）
   2. 役に立つものは何もない
2. 哲学は神学を解明する
   ▶アウグスティヌス：プラトン哲学の採用
3. 哲学が神学を立証する
   ▶アクィナス：アリストテレス哲学の採用
4. 神学は哲学による評価にさらされる
   ▶理神論
5. 哲学は神学に中身を与えさえする
   ▶ヘーゲル

8 ☐ # 第2節　20世紀の哲学 ①プラグマティズム

1. アメリカ合衆国に最も影響を与えた哲学
   ▶ジョン・デューイ
2. ジョン・スチュアート・ミルの思想
   ▶「形而上クラブ」…観念を明晰にする方法
3. 完全な真理など存在しない
4. 命題の経験できる結果
5. 「道具主義」
6. プラグマティズムの真実性と有効性
   1. 「効果がある」とは？
   2. 命題の変更
   3. 評価するための時間的長さとは？

9 ☐ # 第2節　20世紀の哲学 ②実存主義

1. 実存主義の先取り：キルケゴール
2. 本質よりも存在を優先する哲学
   1. 非合理主義の思想
   2. 個人が最も重要
   3. 人間の自由
      - 自由と責任は相互関係にある
   4. 主体性
3. 20世紀の神学者が最も広く活用した哲学
4. 神学の実存主義化
5. 聖書的キリスト教と並行するモチーフ
6. 実存主義の不適切な点
   1. 強い情熱
   2. 主観主義
   3. 諸価値や倫理的判断

10 ☐ # 第2節　20世紀の哲学 ③分析哲学

1. 言語の意味を突き止め、概念を明確化
2. 現代的な意味で分析：ラッセル、ムーア
3. 諸命題の明確化：ヴィトゲンシュタイン
4. 二つの主要な段階
   1. 「論理実証主義」
      1. 数学的真理・論理的真理、経験的真理
      2. 擬似命題、表出的言語
      3. 「理想言語哲学」
   2. 「日常言語哲学」「機能分析」

        - 言葉の誤用を避けさせる
5. 分析哲学における諸問題
    1. 記述的よりも規範的となる傾向
    2. さまざまな類型の言語を厳格に区別しすぎ
    3. 中立的な道具ではない
    4. 我々が満足できない領域の存在

11

第2節　20世紀の哲学
④プロセス哲学

1. 実在は変化するのか、不変なのか？
2. プロセス哲学は形而上学である
3. 神的実在は他のすべての実在と関係
4. 実在の基本単位を「瞬間」「機縁」と
5. 私は毎秒ごとに新しい実在である
6. 採用されるときは大きな衝撃
7. 変化とその結果生ずる善
8. プロセス哲学にも重大な問題が
    1. アイデンティティの基盤とは？
    2. 変化を評価する基盤は？
    3. 変化と不変の間に妥協点は？
    4. 「瞬間」「機縁」とはどれくらいの長さなのか？

12

第2節　20世紀の哲学
⑤脱構築

1. 脱構築はユニークな哲学
2. デリダはハイデガーのもとで学んだ
3. この区別が文芸批評に持ち込まれると
4. このことに呼応するのは言語理解である
5. 伝統的な論理を拒絶する
6. 「ロゴス中心主義」の拒否
7. 実在の基礎のパターンを発見・表現
8. 言語の抑圧的な用法を明らかにする
9. 広範囲にわたり、この議論は危機に瀕している
    1. 広く流通している論理が根拠の薄いものとしたら
    2. もしも脱構築に追従するなら
    3. ロゴス中心主義の欠陥を示すのみ
    4. 自分の理論によって生きていくことは困難

13

第3節　神学による哲学の活用
①神学の中身は哲学ではなく啓示による

1. キリスト教神学は明確な世界観
2. 神がくださった思考力を用いて
3. 実在についての自己の見解の要綱
    1. プラトン的：価値は客観的
    2. バークリー的：実在は精神的
    3. ヘーゲル的：実在は有機的
    4. ロッツェ的：実在は人格的
4. 類型により選択的に取り入れ可能
5. 提示されている世界観は客観主義
6. 真理を統一あるものとみている
7. 論理はすべての真理に適用できる

14

第3節　神学による哲学の活用
②哲学は「思索する」活動である

1. 批評能力を発展させる
    1. 概念についての理解を鋭敏にする
    2. 概念や前提を探し出すのに役立つ
        - より客観的になるのに役立つ
    3. 思想の含意をたどるのに役立つ
    4. 検証する必要性に気づかせてくれる

2. **完全あるいは正確な証拠を期待すべきでない**
3. **批評するときは正当で客観的な基準を用いなければならない**
4. **前提や体系を評価する基準については、宗教的言語の章で**…